

救急看護に貫く
一つの生き方。

中日新聞
「リンクト」LINKED
PRESENTS

シアワセを つなぐ仕事

和田 孝
●救命救急センター救急外来
●救急看護認定看護師

大垣市民病院

企画制作 中日新聞広告局 編集 プロジェクトリンクト事務局



HERE! e-LINKED
www.project-linked.jp/

願い続けた。求め続けた。そして、学び続けた。 そのすべてを發揮できる「大垣市民病院の救急」。

岐阜県西濃地区40万人の三次医療を担う大垣市民病院。全国屈指の救命救急患者数を受け入れる同院の救命救急センターには、20年来の志を貫き、看護一途に人生を歩む一人の看護師がいる。



27名を率いる 救急看護の スペシャリスト。

救急外来受診者数4万649人、救急搬送数8620人（どちらも平成24年度）を受け入れる大垣市民病院救命救急センター。生命の危機に陥っている重症患者すなわち三次救急はもちろん、一次（軽症）・二次（中

等症）の患者も受け入れている。

平成24年1月に新しく建設された救急棟には、27名の看護師が在籍する。全員が救急外来専任である。その陣頭指揮を執るのは、救急外来師長の和田孝

看護師。同センターに次から次へと訪れる救急患者に対応するため、現在は看護師によるトリ

アージの強化に力を注ぐ。

和田は言つ。「トリアージは、救急看護師に必要なスキルの一つです。いかに患者さんから情報を見き出し、問題点を抽出して、仮説、つまり病気を予測し、最終的な判断に結びつけるか。しっかりと思考プロセスを必要とします。緊急性と重症度の見極めですね。スタッフにはしっかりと学び、経験を積み重ねて、身につけてほしい能力です」。

学ぶこと。経験を積み重ねること。和田の言葉には、それを実践してきた者だからこそ熱い思いがある。和田孝、49歳。救急看護認定看護師の資格を持つ、

COLUMN

- 大垣市民病院では、看護師のスキルアップに対し、積極的なサポートを行つて。申請すれば受講した研修費が戻つてくる制度や、無理なく研修に参加できるような勤務スケジュールなど、費用や時間により、貴重な学びの機会を失わないように環境を整え、個人のスキル向上を病院全体のレベルアップに繋げている。
- その一つとして、看護師は3年目になると、全員がJNTEC（外傷初期看護セミナー）という院外研修を受ける。この研修は外傷患者に対する適切な治療・ケアを学ぶもので、防ぎえた外傷死を無くすためのもの。救急隊・医師にも、それぞれに合わせた同様のセミナーがある。
- 「救急の現場は繋がっています。救急隊・医師の機能役割を知り、共通言語を持たなければ、看護師はその輪に入つていけません。現場で円滑にコミュニケーションを取り、治療に取りかかるスピードを上げることが目的であり、救急看護をめざすなら重

9時半からの授業を受ける。ビデオ授業が終わってから大垣に帰ると夜の8時か9時。勤務と、受講とレポート作成に時間を費やし、自由な時間はほぼゼロの1年間だった。

それでも和田の心は折れなかつた。「絶対に救急をやると心に決めていましたが、救急で有名な病院から来ている同期生に比べ、自分の知識やスキルは負けていました。気持ちや思いだけでは、だめだと痛感したんです。でも、大垣市民病院の救急に僕は誇りを持っている。この人たちに負けてはいけないと思いました」。

1年後、同院初の救急看護認定看護師が誕生。資格取得を通じて、和田は「すべての看護行為にはエビデンス（科学的根拠）がある。それを人に伝えられる力を得た」と言う。

医療と患者・家族を繋ぐのが救急看護。

満を持して、ついに和田は42歳で救急の現場へ。「ずっと昔、テレビで見た世界に実際に立った瞬間、言い表せない感情が湧

き上がりました」。

振り返れば、願い続け、求め続け、そして、学び続けた日々がある。なかでもICO時代、ある外国人家族と出会い、家族

FOOROーの重要性に気づいたことが、自分の転換期であるという。「外国人の方は愛情の表し方、私たち医療者への要求がストレートなんです。そうだ、本来、家族ならそういうものだ、と思いました。日本人は言動に出さないだけ。ならば、こちらからアプローチしなければいけないと気きました。救急外来では、それがもっと顕著です。看護師にとって、患者さんに対しては、ご本人が重症であれば医師の補助が主となります。看護師は、フォローはどれだけでもできる。いや、それこそが看護だと想います」。

看護師は、学んだことのすべてを患者さんに活かせる。それがうれしいと、和田は言つ。そこで、患者の社会的背景を理解した上ででの対応を行つている。

●例えば、救急搬送患者やその家族が高齢の場合、特に気持ちが動転し医師の説明が伝わり難いことが多い。そうした場合、大垣市民病院では、親族だけではなく、地域コミュニティまで広げた範囲から、家族をサポートしてくれる人を探します。

●和田看護師は言う。「入院患者さんも救急患者さんも、その背景は一人ひとり違います。まだ入院の場合は、時間にかけて情報を入手することができる。でも救急には時間が限られています。いかに患者さんや家族を短時間に知るか。救急看護師には、そこまで視線を伸ばすことが必要です」。

●超高齢社会の今日、高齢の救急患者はますます増加する。生命を救うことはもちろん、「常に患者の側に立つ」という、同院看護師の姿勢が、今後はますます重要なとなるであろう。



BACK STAGE

企画制作
中日新聞広告局
編集協力
大垣市民病院
〒503-8502
岐阜県大垣市南頬町4-86
TEL 0584-81-3341(代表)
FAX 0584-75-5715
<http://www.ogaki-mh.jp/>

お問い合わせ
中日新聞広告局広告開発部
TEL 052-221-0694
FAX 052-212-0434
プロジェクトリンク事務局
TEL 052-884-7831
FAX 052-884-7833
<http://www.project-linked.jp/>

中日新聞
「リンクト」
PRESENTS

シアワセを
つなぐ仕事

プロジェクトリンクト

検索

LINKED VOL.14 タイアップ

救急看護のスペシャリスト。彼にとって救急の現場は、自ら長い道程を切り拓いてきた先に辿り着いた、自己実現の場であった。

NICU、手術室、ICU。 学びを重ねる。



和田が、救急看護を志して大垣市民病院に入職したのは、25年前だ。精神科の病院に約2年勤めた後のことである。「地元の岐阜県で救急看護をめざすなら、何といっても当院です。(この病院に来てダメなら諦める)といわれるほど地域からの信頼は厚く、また、患者数・症例数が多くて、救急の経験をたくさん積めるのが魅力的でした」。

とはいっても、入職してすぐ救急外来に配属されたわけではない。最初の勤務部署はNICU

(新生児特定集中治療室)である。まったくの未知の世界。「それまで赤ちゃんに触れたことはなく、抱き方さえも解りませんでした。ほとんどが未熟児ですから、薬やミルクなど、とても細かな計算が必要なことを知りました」。先輩たちには質問攻めをし、あとは書籍を読み、ひたすら学んだといつ。

NICUを2年経験し、手術室に異動。「お腹を開けたり、心臓を開けたり。初めは驚きの連続でした。手術件数は多く、夜を徹しての緊急手術もありました。医師ごとに異なる器具を用意し、手術進行に合わせ医師に器具を渡す。とにかくがむしゃらでしたね」。そう語る和田だが、単に器具を用意するだけなら誰でもできると考え、医師ごとに異なる術式をひたすら学び覚え、執刀医の先を読み、常に複数の選択肢を想定する能力や、容態急変にもすぐに対応できる能力を培う。そしてそのマニュアル化を図ったという。時間とかけ、確実に手術室看護師としての知識とスキル、そして医師からの信用を蓄積していく。

8年後、ICU(集中治療室)

勤務へ。救急の現場で力を発揮するために、重篤な患者を看護経験を積みたいと自ら希望した。ICUでは、急性機能不全や手術直後など、短時間に急変する可能性を持つ患者が集中治療を受ける。患者の生命維持を支えるのに必要な幅広い知識、治療介助、観察、医師への情報提供。手術室とはまるで異なる看護能力が必要であり、「これまた新たに勉強しなくては」と覚悟しました」と和田は笑う。

NICU、手術室、ICUで積み重ねた学びと経験は、そのたびごとに、看護師としての和田を一つ上のステージへと押し上げた。

勤務へ。救急の現場で力を発揮するために、重篤な患者を看護経験を積みたいと自ら希望した。ICUでは、急性機能不全や手術直後など、短時間に急変する可能性を持つ患者が集中治療を受ける。患者の生命維持を支えるのに必要な幅広い知識、治療介助、観察、医師への情報提供。手術室とはまるで異なる看護能力が必要であり、「これまた新たに勉強しなくては」と覚悟しました」と和田は笑う。

では、救急看護への志は何だったのか。「これも些細なことで、(笑)。テレビで救急の特集番組を見たんです。改めて、看護師は人の命を救うこともできるのだと気づき、自分もその現場に立ちたいと思いました」。

気持ちや思いだけでは ダメだ。

和田が看護師を志すきっかけは何だったのか。「最初はちょっとした興味です。医療事務の専門学校を卒業後、ある病院で働いていたのですが、仕事で見る診療報酬明細書から、看護師は実際にどんなことをしているんだろうかと。医療の現場が好きでしたから、そこに自分も飛び込みたくなりました」。22歳か

勤務へ。救急の現場で力を発揮するために、重篤な患者を看護経験を積みたいと自ら希望した。ICUでは、急性機能不全や手術直後など、短時間に急変する可能性を持つ患者が集中治療を受ける。患者の生命維持を支えるのに必要な幅広い知識、治療介助、観察、医師への情報提供。手術室とはまるで異なる看護能力が必要であり、「これまた新たに勉強しなくては」と覚悟しました」と和田は笑う。

勤務へ。救急の現場で力を発揮するために、重篤な患者を看護経験を積みたいと自ら希望した。ICUでは、急性機能不全や手術直後など、短時間に急変する可能性を持つ患者が集中治療を受ける。患者の生命維持を支えるのに必要な幅広い知識、治療介助、観察、医師への情報提供。手術室とはまるで異なる看護能力が必要であり、「これまた新たに勉強しなくては」と覚悟しました」と和田は笑う。

